

書道家 武田双雲さん

新しいアートの世界を切り拓く 200%ポジティブ体質の書道家

ミュージシャンや彫刻家などさまざまなアーティストとのコラボレーションや斬新な個展など、独自の創作活動で知られる書道家の武田双雲さん。

「書道は人格修養であり、スポーツであり、コミュニケーションであり、総合アートです」と明言する武田さんは、書道教室も主宰しながら、講演活動も行い、本も執筆するなど八面六臂の活躍ぶりを見せている。「毎日が楽しくて仕方がないし、嫌いな人には会ったことがない」という姿勢はポジティブそのもの。長い歴史を持つ書の世界でも、異色の輝きを放つ。

双雲、筆を選ばず

硯の上で円を描くように墨をする。書く文字の量にもよるが、ときには30分も1時間もすることがある。静謐な時間が流れる中で、ほのかな香りが漂ってくる。墨は、植物油や鉱物油などを燃やした煤と膠を混ぜてつくる油煙墨と、松やにを燃やした煤と膠を混ぜてつくる松煙墨とに大別できる。今、武田さんがすっているのは、香りに特徴のある松煙墨だ。

「墨とか硯とか、書の道具は基本的に長い間変わっていないでしょう。製法も1000年以上、ほぼ変わっていません。ただ僕は、中国の墨より、日本の職人さんがつくった墨の方が好きです」

やはり、道具にはこだわりがあるのだろう。そう思って「松煙墨を使うのはどういうときか」と尋ねると、こんな答えが返ってきた。「こういうときにはこの墨というように、決めているわけではありません。墨の色の濃淡もすり方次第なので墨の種類とは関係ありません。松煙墨は香りがあるので、精神世界を表現するときとか、時間軸の長い言葉を書くときに使いたくなるかもしれませんが、要は

そのときの気分次第。特別なこだわりはありません」

筆は、100本くらい持っている。ただ、よく使うのは10本くらい。職人にオーダーメイドでつくってもらった筆もある。だが、筆にもこだわりはないという。

「弘法、筆を選ばずといいますが、弘法大師は実はものすごく筆にこだわったという説もあります。でも僕は本当にこだわりがありません。100円の筆ペンでもいいし、筆先がぐしゃっとつぶれたような筆で書いても面白いと思ってしまいます。もちろん職人さんのつくる筆は素晴らしいですし、道具を大切にしていると、大切にすべき道具に出会いますが」

“双雲、筆を選ばず”というわけである。



シュッと墨と硯面がすれ合うたびに、松煙墨のよい香りが漂う。

脱サラで始めた書道教室

母親の武田双葉さんが書道家だったため、武田さんは幼い頃から書道に親しんでいた。だが、大学卒業後、NTTに勤めていた時代には、しばらく書道から離れていた。筆を握ることがなくなり、キーボードで字を書く日々が続いたのだった。

たけだ・そううん 書道家。1975年、熊本県生まれ。東京理科大学卒。映画「春の雪」、「北の零年」、NHK大河ドラマ「天地人」、世界遺産「平泉」など、数多くの題字やロゴを手がけている。ロシア、スイス、ベトナム、インドネシアなど海外各国でも書道のパフォーマンスを行っている。「武田双雲にダマされる」(主婦の友社)、「はじめてのお習字」(幻冬舎エデュケーション)、「ここをつよくすることば」(日本出版社)など、著書多数。



ところが正月の休みに久しぶりに帰省したとき、襖書きになっていた双葉さんの書を見て、全身に鳥肌が立つほどの感動を覚えた。子どもの頃から毎日のように見ていた双葉さんの書になぜ、そのとき突然感動したのか、武田さん自身もよく分からないという。ただ、書道から離れていたため、潜在意識の中に埋もれていた書への欲求が逆に高まっていたのかもしれない。

ともあれ、これを契機に武田さんは再び書に向き合うようになる。しかもそれまで以上に書道が好きになったという。字を書くことが好きで、楽しくて仕方なくなってしまうのである。そして武田さんは周囲が引き留めるのを振り切るようにしてNTTを辞め、湘南で書道教室を始めた。

だが生徒はなかなか集まらず、決して順調なスタートとはいかなかった。そんなある日、武田さんは横浜に行ったとき、路上でサクスを演奏している人に出会った。そして激しく感動した武田さんはそのサクスプレイヤーにセッションを申し込んだ。といっても、数メートル離れたところで字を書くだけのことだが、路上で書道のパフォーマンスをする“ストリート書道”や異分野のさまざまなアーティストとコラボレーションするなどの独特の創作活動の原型が、ここから始まったのである。

「サクスの演奏を聞いて感動したように、自分の書く字で人を楽しませたり感動させたりしたいと思ったのです」

「愛」という字に女性が号泣

最初のうちは恥ずかしくて顔も上げられず、ただ黙って字を書くだけだった。やがて「あなたの言葉書きます」という看板を出すと、酔っ払った中年のサラリーマンから初めてリクエストされた。このとき書いた字は「松田聖子」。

それからしばらくして今度は若い女性に「愛」という字をリクエストされた。失恋したばかりだと小

さな声で話していたその女性は、武田さんが書いた「愛」の字を見ると号泣した。自分の作品で人を泣かすことができるという、武田さんにとっては忘れることのできない出来事となった。

以後、武田さんは音楽家、歌手、映像作家、現代アート作家、ダンサーなど、枠にとらわれず数多くの人とコラボしてきた。ピアノ、ハープ、ギター、さらにシタールやトランペットなど、「ほぼすべての楽器演奏家とコラボしてきました」というほどだ。「コラボすると、毎回、大きな刺激を受けます。すべての人から学ぶことがたくさんありました。なんでそんなにコラボするのかとよく聞かれますが、書道

自体、墨職人とのコラボだと僕は思っています。夫婦だって妻と夫のコラボですし、日常生活のなかでもさまざまな人とコラボしているじゃないですか。ひとりで完結できることなんてひとつもありません。だから僕にとってコラボはごく当たり前のことなのです」

そう語る武田さんにとっては、自ら主宰する書道教室「ふたばの森」もある意味、コラボなのだろう。実際、武田さんは書道教室の目的は二つあると指摘する。書の楽しさをひとりでも多くの人に体験してもらうことがひとつ。そしてもうひとつは、生徒から学ぶためだ。

「教えることは最大の学びになります。だから飽きないのです。初心者はこちら考

えるのかとか、この人はこういうことで悩んでいるのだと、いろいろなことが見えてきます。書には人格が現れますから、書道教室は人間観察に最高の場ですよ」

自他ともに認める「書道オタク」

書道の世界には「臨書」という言葉がある。簡単にいえば、手本を真似て書くことだが、字の形を真似る「形臨」、作者の生き方や性格を踏まえ、作品の意図をくみ取って真似る「意臨」、手本を見ずに作者の書風を自分自身のものとして書く「背臨」と



「上手な文字には気持ちよくはなまるをつけます」と豪快にはなまるをつける。

いう3段階がある。真似るは学ぶに通じるというわけで、武田さん自身、今でもよく臨書をするという。

けれども武田さんは、「書の技量を上げるには好奇心を持つことが一番大事」と語る。

「頭の中でどんなにうまくなりたと思っていても、字が好きで仕方がないとか、書くことが楽しくて仕方がないという人に勝てるわけがありません。知識とか義務感では太刀打ちできない。だから字に対して興味を持ち、好きになること。まさに好きこそもの上手なれです」

かくいう武田さん自身は、自他ともに認める「書道オタク」だという。字が大好きで、人が書いた字をずっと見続けているし、時間さえあればいつでも字を書いている。新幹線や飛行機に乗っているときもほとんどずっと字を書きっぱなしだ。面白いことにどんなにたくさんの字を書こうとも、武田さんの指にはペダこができない。腱鞘炎になったこともない。うまく書こうと意気込んで書くのではなく、ただひたすら自分が楽しむためにリラックスして書いているから、余分な力が入っていないのだろう。「書くことが好きなので。どんなに長い時間書いていても飽きるということがありません。楽しくて仕方がない。僕にとって書道はゲームをしているのと同じ、100%、遊びです。遊びで楽しいからいつまでもやっている。その感覚を死ぬまで持っていきたいと思っています」

書の道は奥が深い。武田さんも、自分の字を完璧だとは思っていない。だが、完璧ではなくても、ベストだとは思っている。人と比べてうまいとか下手という評価軸ではなく、自分が好きで書いているのだから、自分の書いた字を否定することはしない。それが武田さんの流儀だ。

「人と比べたり競争したりすると、こうしなくてはいけないと義務感に駆られ、ここがよくないとネガティブに考えるようになってしまいます。でも僕は自分が楽しむのが目的ですから、ここがいいとポジティブに考えます。書道教室で生徒さんの書いた字を見るときも、悪いところを矯正するのではなく、いいところを伸ばすようにしてい

ます。とにかく何でも楽しむことが大切。僕なんて朝目が覚めたとき、さあ今日はどういう角度で体を起こしたらいちばんきれいに見えて楽しいだろうかということを実は毎日考えていますよ」

たとえ同じ文章でも、ワードで書いた手紙と手書きの手紙とでは、確実に伝わってくるものが違う。一つひとつの文字、一本一本の線に思いを込めて字を書くことの楽しさ、素晴らしさを教える現代の伝道師。

武田さんに今、求められている役割は、まさにそこにある。



松籟とは松の梢(こずえ)に吹く風。また、その音。ハリマ化成が科学技術の振興と世界文化の発展を願って、科学技術に関する調査・研究・国際交流に対する助成・奨励を行うことを目的として、1983年3月に松籟の名を冠した”財団法人松籟科学技術振興財団”を設立。現在も公益財団法人として活動している。